

**国語**

(五〇分 満点..一〇〇点)

**注 意**

- 一、指示があるまで問題冊子を開いてはいけません。
- 二、答えはすべて解答用紙に記入しなさい。
- 三、字数指定のある問題は、特別の指示がない限り、句読点、記号なども字数に含みます。
- 四、用具の貸し借りは禁止します。
- 五、指示があるまで席をはなれてはいけません。
- 六、質問があれば、だまつて手をあげて監督者を呼びなさい。
- 七、試験が終わつたら、解答用紙だけ提出しなさい。問題は持ち帰つてもかまいません。

【二】次の①～⑤の——線部について、カタカナの部分は漢字に直し、漢字の部分はその読みをひらがなで答えなさい。なお、答えはていねいに書くこと。

- ① 勇氣を奮つて悪に立ち向かう。  
② 世界でも有数のコクソウ地帯。  
③ 試合に勝つための三つのテツソク。  
④ 造船業はこの国のキカン産業であった。  
⑤ イタダキを目指して山を登る。

【二】次の文章を読んで後の問い合わせに答えなさい。

世の中には、「死んでもカラオケにだけは行かない」と言う人がいます。そういう人は歌が下手なだけかもしない。でも、歌がどんなに下手でも、どんなに音痴おんちで、どんなにだみ声でも、平気でカラオケに行つてマイクを握りしめ朝まで熱唱する人もたくさんいます。私の知り合いにもいます。

ということは、「死んでもカラオケにだけは行かない」のは別の理由があるのかもしない。うたうことは、根本的に恥ずかしいことなのではないでしょうか。その恥ずかしさに打ち勝つことができないくらいにデリケートだから、カラオケに行きたくないのではないか。私もほんとうは人前でうたうのが苦手です。大学で授業をやつているうちに自意識注1まもつが摩耗してだいぶ鈍感になり、「死んでもカラオケにだけは行かない」というほどではなくなりましたが、できれば避けたい。

なぜ人はうたうのが恥ずかしいのか。その理由を深く考えることは私もこれまであまりしませんでしたが、荒川洋治のこの一節にあるとおりなのかもしません。すなわち、「その口のかたちがいつもとはちがう。からだのようすもいつもとはちがう。いつもその人とはちがう。日常をはずれている。反俗的なものである。もつといえは過激である」ということ。私たちはなるべく「いつもの那人」でありたい。そうすることで、無用に目立たないようにしている。しかし、うたうとは、そうした「いつも」をかなぐり捨てることなのです。だから恥ずかしい。

しかし、曲があると、この恥ずかしさは減る。曲のせいにできるからです。制度のせいにすればいい。自分が過激なのではない。曲があるから仕方なくそういうにすぎないのである。では、詩の場合はどうか。詩には曲がつかない。荒川洋治は以下のようにつづけます。

詩は、曲がつかない。だから、はじめからはずかしい。活字で発表するから、はずかしさは若干やわらぐものの、同じことだろう。はずかしいのは、詩を書く人だけではない。歌をうたうとき、人はそれと同じことをしているのだ。曲があるから、

そう見えないだけの話である。勇気のあることをしていることになる。そしてそういう人が、曲のない詩を前にすると、あやしいものを見たような気分になる。首をひっこめる。おもしろい。<sup>(注2)</sup>（一六三）～（一六四）

このように歌一曲＝詩というふうに考えてみると、たしかにわかつてることがある。歌だつて恥ずかしいのに、曲がない詩はもっと恥ずかしい。何しろ「いつものその人とはちがう。日常をはずれている。反俗的なものである。もつといえれば過激である」のです。

実はあまり大きな声で言いたくはないのですが、ひょっとすると私も詩を書いたことがあるかもしません。下手をすると、今でも書いているかもしません。でも、そのことは言いたくない。恥ずかしいからです。なぜ、恥ずかしいのでしょうか？ 荒川洋治の言うとおりのような気がします。いつもの自分ではなくなつてしまふ。「おそらく私の肩書きが『詩人』だつたら、そんなに恥ずかしくはないでしよう。肩書きのせいにできるからです。『何しろ自分は詩人だから、仕方なく詩を書いているのだ。まつたく参つたよ』などと□顔で言える。でも、詩人でもないのに詩など書いていると、かえつて本気みたいに見えてしまう。つまり、本氣で「過激」になつていると見えてしまうのです。本気に見えてしまつたら、「いつものその人」をかなぐり捨てたも同然。そんな恥ずかしいこと、とてもできない。

しかし、詩を書くことに意味があるとしたら、この「恥ずかしさ」を背負つていることが大事なのではないかと私は思います。ひよいひよいと恥ずかし気もなく語られてしまう詩にどれだけの価値があるのか。

詩はかつては歌とほとんど同義でした。それは『みんなのもの』だった。共同体や制度が詩をしていましたからです。詩にはいろいろな形の上での決まりがあり、内容にも縛りがある。だから、みんな安心してそれを『歌う』ことができた。<sup>2</sup>まわりの人や制度を信頼することで、伸び伸びと自分を解放できる。今でもそうかもしれません。うまく歌える人というのは、そういうふうに自分を外にむかって解き放つことのできる人。

しかし、詩は、今、歌とはちがいます。詩にはうたうことに対する疑いがこめられています。そういう意味では、高村光太郎の「牛」は微妙なところを揺れているとも言えます。今にも黙ってしまいそうなたどたどしい語り口ではありますが、たとえば以下のような部分では、詩がほとんど歌と化しつつあるように聞こえる。

利口でやさしい眼と

なつこい舌と

かたい爪と

厳<sup>げん</sup>肅<sup>しゆく</sup>な二本の角と

愛情に満ちた啼声<sup>注3てせい</sup>と

すばらしい筋肉と

正直な涎<sup>よだれ</sup>を持った大きな牛

牛はのろのろと歩く

牛は大地をふみしめて歩く

牛は平凡な大地を歩く

「牛はのろのろと歩く」と例<sup>注4</sup>のくりかえしが出てくることで、何とか歌にブレー<sup>キ</sup>がかかり、おかげで安樂な歌にはなりませ

んが、歌寸前の部分です。

詩が歌にならないことが大事なのは、詩が「こんなことを言つていいのだろうか」という言葉に対する畏<sup>おそ</sup>れを担うことのできるジャンルだからです。もちろん散文でも恥ずかしさの意識を表現することは可能かもしれませんのが、その場合、「こんなこと、言つてもいいのだろうか」というふうに疑問を直接的に説明的に語ることになりがちです。それではアリバイ工作のように聞こ

れるかもしない。

詩の場合はちょっと違います。何しろ詩はもともと歌とほぼ同義だったから、今でも歌に肉薄できる。肉薄することこそ、歌との際どい違いを見せつける。今にも歌になりそうなのにならないという瞬間を示すことで、歌を疑うということを実演してみせるのです。実際に行うのと、言葉で説明的に言うのとはかなり違う。

このことを考えるのにちょうどいい例があります。山之口謨の「牛とまじない」という詩です。おもしろいのは、ここでも主役が「牛」だということです。

のうまくさんまんだばざらだんせんだ

まかろしやだそわたようんたらたかんまん

ぼくは口にそう唱えながら

お寺を出るとすぐその前の農家へ行つた

そこで牛の手綱を百回さすつて

また唱えながらお寺に戻つた

お寺ではまた唱えながら

本堂から門へ門から本堂へと

いしだたみ石畳の上を繰り返し往復しては

合掌することまた百回なのであつた

もう半世紀ほど昔のことなのだが

父は当時死にそこなつて

三郎のおかげでたすかつたと云つた

牛を見るといまでも

文明を乗り越えておもい出しが

またその手綱でもさすつて

きのこ雲でも追つ払つてみるか

のうまくざんまんだばざらだんせんだ

まかろしやだそわたようんたらたかんまん

語り手の父は、牛を使ったまじないのおかげで助かったという。病氣だつたのか、別のことだつたのかは、この詩だけからはわかりません。そんな父ももう、とうに亡くなつたのでしょうか。すべて昔のことです。でも、語り手は今、牛のそんな神通力を信頼してみたい気持ちになつていて。それだけ、追い詰められた気持ちになつていて。何に追い詰められているのか。「きのこ雲」、すなわち核でしょうか。あるいは核が代表する軍事的な装置や、もつと文明一般の恐ろしさのことかもしれません。<sup>4</sup>

でも、「きのこ雲でも追つ払つてみるか」なんていう言い方をする語り手は、どこまで本気なのでしょう。かなり本気なのは間違いありませんが、最後の一歩で、ちょっとだけ「待て」という声が聞こえるような気もする。ほんのわずかな疑いがある。それは何より「のうまくざんまんだばざらだんせんだ／まかろしやだそわたようんたらたかんまん」と唱えられるお経の扱いにあらわれています。この言葉が必ずしもすべての読者に対してもう意味をなすわけではないことを語り手は知っています。そんな言葉をわざと詩の冒頭と最後にもつてくることで、語り手はことさら無言すれすれのところをさまよつてみせているかのようです。

その無言の奥にあるのは、『牛的』なものです。牛的とはどんなものか。ちょうど高村光太郎の「牛」を読んだばかりの私たちにはとてもわかりやすいはずです。雄弁をつらねたり、敏捷に身をひるがえしたりする感性とは対極にあるものです。高村

注<sup>5</sup>

の「牛」では、「牛はがむしゃらではない／けれどもかなりがむしゃらだ」という印象的な一節がありました。きつと『牛的』なものとは、愚鈍<sup>ぐどん</sup>で、一途で、変わらなくて、でも誠実で、何より言葉を持たないもの。語り手にとってはそれが「自然」というものを具現するのかもしれない。少なくとも恐ろしい「文明」に抗うにはもつとも効果的なお守りのようです。

こうして語り手は、わざと意味のわかりにくいお経の言葉を詩に放り込み、その背後にいかにも鈍重そうな牛を立たせることで、共同体の心地良い幻想から一步距離を引いているとも思えます。ほんとうなら美しい曲として聞こえてきそうな故郷の歌を、地味でくすんだもの、鈍重で不明瞭で寡黙<sup>かち黙</sup>なものとして提示している。牛やまじないは、一方では共同体の夢への信頼をあらわしますが、他方、そんな夢の歌の聴き取りづらさをも示す。

語り手は知っているのです。もはや追い詰められた個人が、共同体の夢をあてにして自分を解放できるような時代ではなくなったことを。自分というものをそう簡単に手放すことはできない。自分はしつこく自分に返つてくる。まとわりついでくる。だから、自分の発言もブーメランのように自分に戻つてくる。それが言葉の「はずかしさ」というものです。

しかし、この恥ずかしさはきわめて重要なものです。乗り越えたり、忘れたりすればいいものではない。なぜなら、深々と恥ずかしい気持ちとともに語られた言葉には、「ほんとうにこんなこと言つていいのか」という迷いや疑惑や覚悟の生む、一種の威力<sup>威力</sup>があるからです。ほんとうに強いのはそういう言葉です。ひよいひよいと言えてしまふ言葉など、たいした力を持つことはできない。

(阿部公彦<sup>まさひこ</sup>『詩的思考のめざめ 心と言葉にほんとうは起きている』)

※問題作成の都合上、問題文には省略したり表記を改めたりしたところがあります。

注1 摩耗して……すり減つて、という意味。

注2 (一六二)～(一六四)……この段落は、荒川洋治『詩とことば』(11011年六月)の一六二ページ～一六四ページにある。

注3 啼声……なきゞえ。

注4 例のくりかえし ／注5 ちょうど高村光太郎の「牛」を読んだばかりの私たちには……問題文中だけではなく問題文の出典となつた『詩的思考のめざめ 心と言葉にほんとうは起きていること』に高村光太郎の「牛」について述べている部分がある。高村光太郎「牛」は一五〇行に及ぶ詩であるが、その中で「牛はのろのろと歩く」という言い回しが八度出てくる。

問一

□

問一 □ にあてはまる言葉として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 涼しい
- イ 嫌らしい
- ウ 清々しい
- エ 怪しい

問二

～線 a 「なぜ」と言葉の働きの性質が同じものが問題文中の～線イ～ニの中に一つあります。最も適当なものを一

つ選び、記号で答えなさい。

問三 ～～線 b 「無用に」とあります。が、問題文中での意味と同じものとして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 不様に
- イ 不意に
- ウ 不必要に
- エ 不自然に

## 問四

――線 1 「うたうことは、しないでしようか」とあります。が、このように言えるのはなぜですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 身体の振る舞いが普段とは異なるようになり、これまで自分が苦労して築き上げてきた社会的な地位や名誉に傷が付いてしまうことになつてしまふから。
- イ 身体の能力について不安になり、自分の理想とする表現にはどうあがいても到達することができないと痛感するようになつてしまふから。
- ウ 身体について他人との違いが明確になり、内面にひそんでいた他人をうらやむ気持ちが意図せずに表に出てくることになつてしまふから。
- エ 身体の動きが非日常的になり、社会の中で常日ごろ振る舞つている自分とは異なる、必死になつてているようすが明らかになつてしまふから。

問五 ──線2「まわりの人や制度を信頼する」とあります。これはどのように考へるといふことですか。その説明として

最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答へなさい。

ア 生きていくうえでみんなが同じことを大切だと考へているなかで、表現するには形が大切であり、形に似せようとする努力を続けていくことの大切さを共有する仲間から、表現の本質をきつと教えてもらえるはずだと考へるということ。

イ みんなが思いや考へを共有しつつ生きていたなかで、表現するにあたつてもみんなが同じものを重んじて、それを大きくはみ出してさへいなければ、表現する自分をわかつてもらえるはずだと考へるということ。

ウ 人生の目安がみんなにとつて明確であるなかで、表現することの恥ずかしさを多くの人と共有して、表現することをみんなにとつて当たり前のことにして恥ずかしさは軽減されるはずだと考へるということ。

エ どのように生きるべきかが自明のものとしてみんなに共有されているなかで、自分らしい表現は他人と表現のルールを共有してはじめて成り立つものであり、独自の表現を模倣する前にルール作りが先決であるはずだと考へるといふこと。

問六

——線3 「それではアリバイ工作のようごに聞こえるかもしない」とあります。 「こんなことを言つていいのだろうか」と文章で述べることについて筆者はどのように考えていると言えますか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「こんなことを言う」ことに異議を唱えたとしても、実際には「こんなこと」を述べていることには変わりなく、その振る舞いはある行為をやり遂げたにもかかわらずやり遂げなかつたことを証明しようとしているようなものだ。

イ 「こんなことを言う」ことに疑問を投げかけたことにより、実際には「こんなこと」について少しも興味がないことが明らかになつて、その振る舞いはある行為をやり遂げるつもりはなかつたという事実を理解させようするようなものだ。

ウ 「こんなことを言う」ことに反感を示したことは、「こんなこと」を述べた事実をなかつたことに対することになり、その振る舞いは事実とは食い違つてある行為をやり遂げなかつたように信じ込ませるようなものだ。

エ 「こんなことを言う」ことに不安を表明したとしても、「こんなこと」への本当の思いを包みかくすことにはならないで、その振る舞いはある行為をやり遂げていないのに、やり遂げたという証明をわざわざしようとするようなものだ。

問七

——線4 「きのこ雲でも追つ払つてみるか」なんていう言い方」とあります。筆者はこの言い方にどのようなことを見いだしていると言えますか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 行為としての「追つ払う」とその対象としての「きのこ雲」という組み合わせが似つかわしく実際的で、のどかな感じを与えていて、「～でも」や「～みるか」という言葉を付けることで行行為をなしどうとする気持ちが不明確になり、表現への疑問を表す言い方になつてているということ。

イ 行為としての「追つ払う」とその対象としての「きのこ雲」という組み合わせが奇抜な感じであるだけでなく、「～でも」や「～みるか」という言葉を付けることによつて行行為の選択の多様性を示し、あきらめの感じを確かに表す言い方になつてているということ。

ウ 行為としての「追つ払う」とその対象としての「きのこ雲」という組み合わせが不釣り合いで現実的な感じがないことに加えて、「～でも」や「～みるか」という言葉を付けることによつて行行為やその対象をあいまいにして、表現へのためらいを表す言い方になつてているということ。

エ 行為としての「追つ払う」とその対象としての「きのこ雲」という組み合わせが意外な感じであるだけなく、「～でも」や「～みるか」という言葉を付けることによつて行行為とその対象との関係を明確にして、対象への怒りを前面に出す言い方になつてているということ。

問八 問題文について説明したものとして適切でないものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。ただし、解答の順序は問いません。

ア 荒川洋治の文章（「詩は、～おもしろい。」）は筆者の考えをわかりやすくするために筆者の文章に引用されたものである。

イ 高村光太郎の詩（「利口でやさしい～歩く」）は筆者の意見とは異なる作品の例として筆者の文章に引用されたものである。

ウ 具体的で身近なエピソードから入って、難しいと思われがちな詩の世界への興味を次第に抱かせるような文章の構成になっている。

エ 「です・ます」体の文を交えた文章であり、柔らかな語り口が親しい印象を与え、読者の共感を生みやすいようになっている。

オ 具体例をいくつも挙げてそれらから共通する要素を取り出し、自分の主張へと導いていくような文章の構成になっている。

問九

――線「深々と恥ずかしい気持ちとともに語られた言葉には、～一種の威力がある」とありますが、筆者が考える人の心を動かす詩とはどのようなものであると言えますか。その説明となるように、詩と歌との関係をふまえて次の文の空らんにあてはまる言葉を四十字以上、五十字以内で答えなさい。

・人々の心を揺さぶる詩とは、

ものである。

【三】次の文章は、堀江敏幸の小説「スタンス・ドット」(『雪沼とその周辺』所収)の一節です。その晩限りでボウリング場を閉めようとしていた経営者の「彼」は、ドライブの途中でトイレを借りようと偶然来場した青年とその連れの女性に最後のゲームをプレゼントし、スコアシートに得点を書いてあげています。これを読んで、後の問い合わせに答えなさい。

「あの、お疲れですか？」

聞こえるほうの耳に青年の声が滑り込んで、彼はわれに返つた。

「第五<sup>注1</sup>フレームが七本と一本、第六フレームが八本のスペアです<sup>注2</sup>」

あわててスコアに得点を書き込む。スペアは出たけれど、どうも思いどおりにボールが曲がらないなど愚痴<sup>ぐち</sup>つっている青年に、備えつけのボールではプロみたいなフック<sup>注3</sup>は投げられないんですよ、と言いかけて口をつぐんだ。ハウスボールは右利き<sup>うりき</sup>でも左利きでも使えるように穴がうがたれ、しかも重心が真ん中に設定してある。よくまわるコマとおなじ道理で軸がぶれないから、極端な曲がり方はしない。反対に、オーダーメイドのボールは重心をずらしてあるため、回転をかけると左右どちらかに傾き、レーンのワックスが途切れた瞬間に摩擦がかかるって、蛇が鎌首<sup>かまくび</sup>をもたげたような曲がり方をする。そういう知識をみな、彼はハイオクさんに教えてもらつた。

ハイオクさんは、彼が東京郊外にある大学の理学部に通っていたときアルバイトをしていた、ガソリンスタンドの顧客だつた。古いけれども手入れの行きとどいた車に乗つてきて、質のいいほうのガソリンを頼むのだが、どこで仕入れた知識なのか、当時はレースでしか使われていなかつたハイオクを冗談めかして注文するものだから、店員のあいだでそんなあだ名をつけられていたのだ。口数の多くない彼にも自然と言葉を出させてしまう、親しみやすい雰囲気を持つた人だつた。

ある日、彼が応対に出ると、助手席に真っ黒なドクター鞄<sup>かばん</sup>らしきものが置かれていた。お医者さんだつたんですか、と作業をしながらさりげなくきてみたところ、いやいや、中身はボウリングの球ですよ、この先にあるボウリング場を<sup>ゞ</sup>存じですか、エイトプリンシーズボウル、あそこで働いてるんです、とハイオクさんは笑みを浮かべ、一度遊びに来てくださいと誘つた。好

奇心にかられて、休みの日に友達とのぞいてみると、ハイオクさんはたいそう喜んで、そこではじめて、彼はハイオクさんが元プロボウラーであることを知らされたのだった。ツアーダけでは食えないからレッスンプロとして授業料を取ることでなんとか暮らしを作り立させていたのだが、ある年、事情があつてオフにこつそり働いていた建設工事現場で利き腕の親指に大怪我おおけがをし、リーグ戦を闘い抜く力を失った。リハビリにはげんに復帰をめざしたものの、二二ゲーム連続でこなすと傷ついた指が硬直して動かず、どんなに厳しい練習を重ねても持久力が戻らなかつた。思い描いたとおりの球が投げられないようではプロを名乗るわけにいかないし、レッスン料を取るわけにもいかない。潔癖なハイオクさんは、四十代なかばで引退を決意し、所属先のボウリング場で働くことになつた。いまは温厚な人柄を慕つてくるプロの卵たちに、勤務のあいまを縫つて無料でコーチをしているのだという。

ハイオクさんの教え方はすばらしかつた。口頭で簡単な指示を与えるだけで手取り足取りのレッスンはしないのに、アドバイスをもらつた人の変貌へんぱうぶりを見ていれば、まわりの人間にも、それがどれほど的を射ていたかがじつによく理解できた。野球のマウンドやサッカーの芝、そしてスケートリンクの氷から容易に想像がつくよう、朝と夕方とではレーンの油の乗りがちがい、おなじ時刻でも日によって微妙な感触のずれが生まれること、それを読み解くには豊富な経験が必要なことをハイオクさんは楽しげに語り、求められればスタンスの取り方を図2で示してくれたりした。

ただし、まれに披露ひろうしてくれる実技のほうは、不思議なことにそうした注意事項をことごとく無視するものだつた。なにしろフォームからして妙なのだ。へっぴり腰というのかなんというのか、構えるときボールを胸もとまであげず、ベルトのあたりで肘ひじを折つたまま重すぎて持てない西瓜すいかみたいにボールをぶらさげ、折つた腰のぶんだけお尻しりがぴょこんと出たかつこうになる。バックスイングはほとんどなく、投球動作に入つた後姿は、まるでかぶりものペンギンだつた。ところが、この窮屈きゅうくつなフオームから放たれたボールが音もなくレーンを滑り、彼の耳を魅了かなしつづけているあの音を奏かなでるのだ。ひろびろとした場内、三十あるレーンすべてでゲームがおこなわれていても、ハイオクさんの投げたボールの音はすぐに識別できた。彼だけでなく、誰もがそうだつた。

「……ここで六本かあ……せめて九本欲しかつたな」と青年が言う。

第七フレームの一投目でしくじつて、ここまで65点。あちこちに考えが散ってしまうせいか、聞こえる音に波がてきた。第一フレームで聴取しかけた心地よい音の球が、なかなかやつて来ない。ちらりと腕時計に目をやつたその視線の動きに、お時間は大丈夫ですか、とすばやく女性が反応する。予定の閉店時間を、とうに過ぎていた。ご心配なく、このゲームの終わりがすなわち閉店ですからと彼は笑みを浮かべ、青年にむかって、ピンが残つたら立ち位置を変えてみるといですよ、と初歩的なアドバイスを送つた。ハイオクさんがよくそう言つていたのだ。自分の力やフォームにあわせたアプローチの距離と立ち位置を定めるために、床に埋められたスタンス・ドットのどこに足を置いたら最適かを見きわめること。<sup>注5</sup> ファウルラインのスパットと<sup>注6</sup> その先にある的をむすぶ軌道を頭のなかで描いて、ピンを凝視しないこと。<sup>注7</sup> スペアを狙う際には、残留ピンの形にしたがつて立ち位置を変え、球の進入角度を調整してそのつど足の置き方をずらすこと。<sup>注8</sup> フォームさえ安定していれば、すべてはアプローチで決まる。

ところが、ハイオクさんはどんなに複雑なピンが残された場合でも、ぜつたいに立ち位置を変えなかつた。目印のスタンス・ドットを一個たりともずらさず、平行ピンが出現してもレーンの端に移動したりしなかつた。こういう投げ方では、ピンの配置によつてスペア不可能なものが出てくる。試合に勝てなかつたのは、そのためだらう。自分のスタンスにたいするハイオクさんはおなじプロでものこだわりがどこから来ているのか、彼にはよく理解できなかつた。プロボウラーになるまえ、ハイオクさんはおなじプロでも野球の投手を目指していて、ついに大成しないままユニフォームを脱いだ、というまことしやかな噂うわさもあつたが、たしかにあの投げ方は、おなじフォーム、おなじリリースポイントから異なる球筋を繰り出す野球のピッチャーのそれに似ていなくもなかつた。

ただひとつ確かだつたのは、ハイオクさんの投げた球だけが、他と異なる音色で。ピンをはじく、ということだ。ピンが飛び瞬間の映像はおなじなのに、その一拍あと、レーンの奥から迫り出してくる音が拡散しないで、おおきな空気の塊になつてこちら側へ匍匐はづく<sup>注10</sup>してくる。ほんわりして、甘くて、攻撃的な匂いがまつたくない、胎児の耳に響いている母親の心音のような音。彼は

間の映像はおなじなのに、その一拍あと、レーンの奥から迫り出してくる音が拡散しないで、おおきな空気の塊になつてこちら側へ匍匐ほく<sup>10</sup>してくる。ほんわりして、甘くて、攻撃的な匂いがまつたくない、胎児の耳に響いている母親の心音のような音。彼は

なんどかその音と立ち位置の秘密をさぐらうとしたのだが、スタンス・ドットは、立ち位置を変えるためのものでなくして、それを変えないためのものなんだよ、わたしにとつてはね、と笑つて答えなかつた。模擬試合の行方を決するスペア狙いでも、ハイオクさんの立ち位置は変わらない。奏てるピンの音も変わらない。それが誰にも真似まねできないハイオクさんのスタンスだつた。まだつきあつてゐるころから、彼は妻にその話をよく語つてきかせた。ハイオクさんが自身のスタンス・ドットをひとつもずらすことなく亡なくなつたとの報せを友人から受けたのは、リトルベアーボウル開業の準備をしているさなかのことだつた。

なぜこんなことをつらつら思い出すのか。煙草たばこを持つ女性の左手に、紫色の石のついた銀の指輪が鈍にぶい光を放つてゐる。一月生まれか、と彼は思う。妻もアメジストの指輪をすることがあつた。誕生日に彼が贈つたものだ。これを身につけていると、かならずいいことがある、お守りなんだから長生きできるかもしれない、百歳まで生きられそうよ、と妻は根拠もなしによくそう言つていた。

「……百に届くかな」

青年の声に、ぎくりとする。もう大詰めだ。第八フレームの一投目で八本、青年は彼の意見を聞き入れてアプローチを左に移し、十番ピンを対角線に狙つてみたが、右のガーター注<sup>11</sup>につかまつた。第九フレームはスペアなしの九ピン。合計82点。大台に届くか否かは、最終フレームの投球で決まる。すべて終わつたら、このふたりにどんな顔をすればいいのだろう。いや、自分にたいしてどんな顔を見せればいいのだろう。意外にも、彼は緊張はじめていた。

目のまえで、青年が身をかがめて女性になにやら話している。声がずいぶん遠くにあるようだ。かつては彼も、妻の耳もとであんなふうにささやくことがあつた。

「……と思……です」と青年が言う。

よく聞こえない。口だけ動いているように見えて、彼は当惑した。

「失礼、いま、なんとおつしやいました？」

「…………ですし、やは……いいと思うんです」

声がとぎれがちになる。青年がそんなふうに喋るはずはないのだから、こちらの耳がおかしいのだ。申し訳ありません、なんだかぼんやりしてしまいまして、と彼はもう一度詫びた。補聴器をつけているので、耳が悪いのはふたりとも察しているはずだが、つけていないほうの耳まで聞こえなくなっているとは思わないだろう。

「手洗いを……しようと思……だけなのに……がとう……ました」

ふたりいつしょに立ちあがつて頭を下げたのに彼は驚き、まだテンフレームが残つておりますよ、とあわてて言つた。

「……もう、じゅうぶんに……いただきました。最後はご自身で投げ……お辞めになるのな……」自身で締めてくくださらなきや

そうか、最終フレームを自分で投げろと言つているのだ。

「いえいえ、せつかくここまで来たんだから、あなたが投げてください」

「もうじゅうぶんです」と、女性のほうが口を開いた。トーンが変わつて、今度はよく聞こえる。<sup>注12</sup>

「さあ、どうぞ。あしたちが勧めるのもへんすけれど」

なるほどおかしな話だ。予想もしなかつた展開に、彼はしばし沈黙で応じた。耳の調子が悪くなつてから、いや妻がいなくなつてから、じつはまったく投げていない。ハイオクさんの音をみずから手で再現しようという夢もいつしか捨て去つていた。鼓膜に焼きついているあの不思議な音がこのレーンに響いたことは一度もないのだ。試みるとしたら、いましかないのかもしれない。アプローチのスタンス・ドットに落とした目を彼はゆつくりとふたりにむけ、ひと呼吸置いてから、お気づかいありがとうございます、お言葉に甘えさせていただきます、と言つた。それからカウンターまで戻り、足もとにある両開きの棚にしまつてあった黒い鞄を取り出した。たてつづけに車が売れたとき、そのご褒美としてつくらせたマイボールだ。色は黒、中指と薬指のグリップが浅く、親指がしつくりと穴になじむ。だが、さすがに以前より重く感じられた。この年じや、ぴたりする球を使わないと怪我をするんです、と聞かれもしない言い訳をして、彼はアプローチに立つた。

百歳まで生きられそよ、と妻の声がする。百か、と彼は思った。最初の一投でストライク、あるいは一投目でスペアをとり、そのあと八本倒せば百点には到達する。しかし彼が欲しかったのは点数ではなく、あの音だった。取り出したボールを布でひと

とおり拭い、彼は右耳の補聴器を静かにはずした。音が急に退いて、だだつびろい空間に自分だけ取り残されたような気がしてくる。ボールを抱え、右からふたつ目の印に右足のつま先を合わせる。学生時代から変わらない、彼のスタンス・ドットだ。しかし本当にこの立ち位置でよかつたのだろうか。あの音を一度も鳴らしえなかつたこの位置でいいのだろうか。もうわからぬ。背後でふたりが息をつめている。彼はゆっくりと左足を踏み出した。二歩目の移動でもう球筋が見える。今朝のワックスの分量とその分布は頭に入っていた。どの程度滑るのか、どこでフックがかかるのか、彼は誰よりもよく知っていた。このまままっすぐ歩いてファウルライン右端のスポットで鋭く腕を振りあげれば、ボールは一番ピンと二番ピンのあいだをとらえるだろう。だがリリースの瞬間、指がへんなぐあいに抜けて青年そつくりにボールをレーンにたたきつけるような投げ方になり、にもかかわらずレーンに落ちる音がすうつと立ち消えてボールはくるくると滑りながらスイートスポットにたどり着き、あとひと息というところで古いピンの音がガン<sup>5</sup>ゴーンガンゴーンといつせいに鳴りはじめ、それが聞こえない耳の底からわきあがる幻聴のか現実の音なのか区別できぬまま、たち騒ぐ沈黙のざわめきのなかで身体を凝固させた彼の首筋に、かすかな戦慄<sup>せんりつ</sup>が走った。

- 注1 フレーム……得点を記入する枠のこと。ボウリングは第一フレームから第九フレームまでは最大二球まで、第十フレームは最大三球までの投球ができ、この十のフレームで一ゲームを構成する。
- 注2 スペア……一投目で残つたピンを、二投目ですべて倒すこと。
- 注3 フック……ボールが左側に曲がること。
- 注4 オーダーメイドのボール……自分の好むように注文して作らせたボールのこと。
- 注5 アプローチ……ここでは、投球までの助走のことをさすが、本来は、ファールラインの手前のボールを持って投げるエリアのこと。
- 注6 スタンス・ドット……アプローチの手前に二列で付いている丸いマークのこと。
- 注7 ファウルライン……レーンとアプローチの境界を示す線のこと。

注8 スパート……七つの三角形の目印のこと。

注9 平行ピン……一投目で残ったピンが、④—⑥、⑧—⑩など平行な状態になつていること。

注10 獄籠してくる……ここでは、音が地面をはうように迫つてくること。

注11 ガーテー……レーンの両側にある溝のこと。

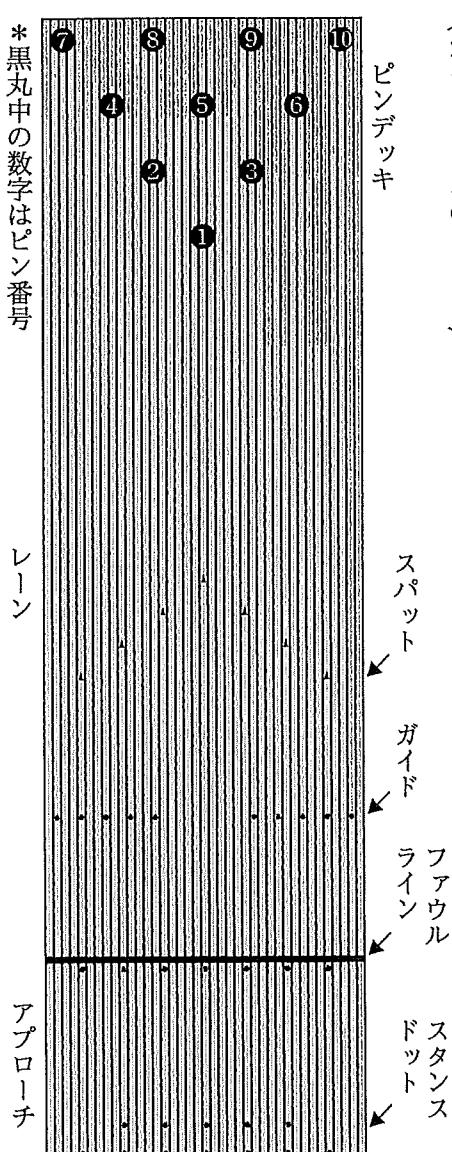
注12 トーン……ここでは、声の高さのこと。

注13 たてつづけに車が売れたとき……ボウリング場を開業する前の「彼」は父親から引き継いだ中古車販売店を経営して

いた、ということがこれ以前の場面で描かれている。

注14 スイーストポット……ストライクを出しやすいとされる、一番ピンと二番ピンの間のこと。

### 〈ボウリングのレーン〉



問一 線1 「ハイオクさん」とあります。この人物はどのように描かれていますか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 情に厚く、職場の後輩からも慕われていた。しかし、周囲を和ますためによく言う冗談のために、一部の人びとからは軽んじられていた。

イ おだやかな人柄ながら、生き方には確固とした信念をもつていた。ただし、不運にも見舞われて、思うような人生を歩めなかつた。

ウ ボウリングの指導がうまい人物だつた。ただし、見栄つ張りで、周囲の人から評価されたいという思いが強すぎて、煙たがれていた。

エ おおらかな人物で周りの人から尊敬されていた。しかし、怪我をしたため勤務先に居づらくなり、夢を断念せざるを得なかつた。

問二 線2「不思議なことに」とあります。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ハイオクさんの球は、「彼」を魅了するみごとな音を出すことができたにもかかわらず、そのフォームは音とは

不釣り合いな無様なものだつたということ。

イ ハイオクさんは、簡潔ながら適切なアドバイスでしばしば目を見張るほど他人を上達させることができた一方

で、やつてみせてくれることはほとんどなかつたということ。

ウ ハイオクさんは、ボウリングに関する豊富な知識をもち、気前よくそれを他人に教授してくれたのだが、技量のほうはそれに見合つていなかつたということ。

エ ハイオクさんは、ボウリングという競技を深く理解し、的確な指導もできたのに、時たま見せてくれる実演はとてもお手本になるものではなかつたということ。

問三——線3「いや、自分にたいしてどんな顔を見せればいいのだろう」とあります、このときの「彼」の気持ちはどのようなものですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 昔のことをあれこれと考えていたら、青年の声で現実へと引き戻された。ゲームも終盤となり、経営してきたボウリング場の廃業が改めて差し迫ったものに感じられて、にわかに自分の半生をどうとらえるべきだろうかとう思いにとらわれ、困惑している。

イ 大台の百に届くかどうかが最終フレームの投球で決することになり、青年も最後の投球を前に緊張しているようだ。自分からゲームをするように勧めた手前、もし青年の投球が失敗してしまつたら、なんと言つてなぐさめるのがよいだろうかと思案している。

ウ ぽんやりと過去を振り返つていると、最後の投球がはじまるところだった。青年たちに閉店時間が近いのにゲームしてもらったのは、少しでもその終業を遅らせたかったからだということによくやく思い至り、その経営に半生を捧げた店への愛着をかみしめている。

エ 大台に届くか否かは別にして、青年の投球が終わるとボウリング場も廃業になる。自分が人生の節目を迎えていることに今更ながら気づき、投げ終わった後一人にどんな言葉をかけてこの場を締めくくるべきか見当がつかず、息が詰まるような思いをしている。

問四

——線4「さあ、どうぞ。あしたちが勧めるのもへんですけれど」とあります、このときの女性の気持ちについて、六十字以上七十字以内で説明しなさい。

問五

——線5 「たち騒ぐ沈黙のざわめきのなかで、かすかな戦慄が走った」とあります。この部分から読みとれることと

して最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 青年たちが自分の球を投げる様子を<sup>かたず</sup>固睡を飲んで見つめていたので、思いのほか緊張してしまった「彼」は、ハイオクさんのようなぎこちないフォームになり、期待通りのストライクをとることができず、体を硬直させたということ。

イ 補聴器を外し、体をこわばらせながら意識を集中して球の音を聞き取ろうとする「彼」には、不本意な投げ方になってしまった最後の一球が、ハイオクさんの球と同じあの音を出したように感じられて、驚きのあまり身震いをしたということ。

ウ ハイオクさんの音をみずから再現したいと思つていたのに、右耳の補聴器も外してしまったので、せつかく投じた最後の一球が発した音をうまく聞きとることができず、「彼」は自らの犯した過ちを悔いて、手足を震わせたということ。

エ 聴覚を失いかけていたにもかかわらず、ピンをはじいた音が母親の心音のように安らかに鳴り響くのを実際に聴取した「彼」は、ボウリング場の最終日に自らの幼いころからの夢をかなえることができ、その喜びに酔いしだといったということ。

問六 この問題文から読みとれる」として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「彼」だけがピンをはじくハイオクさんの球の音を識別できたのは、ボウリングにおいてはスコアよりも球の奏でる音の美しさのほうが大切だと考えるハイオクさんの美意識を「彼」もまた共有することができたからだ。
- イ 「彼」を魅了してやまないハイオクさんの投げた球が奏でる音が、「彼」の母親の心音にたとえられているのは、ボウリング場の経営に行きづまつた「彼」は、母親に守られていた子供時代をなつかしく思っているからだ。
- ウ 自己の流儀をつらぬくことを大切にしていたハイオクさんに共感してきた「彼」が、ボウリング場の閉店の夜にこれまでの半生を思い返し、必ずしも順風満帆ではなかつたが、自分なりに生き方にこだわつてこられたように感じた。
- エ 耳をわざらつたり、ハイオクさんの音を再現できなかつたりしたまま、失意のうちにボウリング場を経営してきた「彼」は、青年とその連れの女性との交流を通じて、妻やハイオクさんをうしなつた悲しみから少しづつ立ち直ることができた。

問七 この問題文の表現の特徴について述べられている」ととして適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。なお、解答の順序は問いません。

ア 問題文の15ページには、「重すぎて持てない西瓜みたいに」や「まるでかぶりもののペンギンだった」といった

隠喩表現によって、ハイオクさんの投球フォームを描写した部分がある。

イ 問題文の会話表現に着目すると、会話表現であっても「」がつけられているものと、そうではないものがあり、

それはどの登場人物が話した会話かによって区別されている。

ウ 青年の会話表現にあらわれる「……」という符号の中には、客観的には発語されながらも、耳が不自由な「彼」

にはうまく聞きとれなかつた発言をあらわしているものがある。

エ この問題文は、「彼」がボウリング場の最終営業日を迎えている「今」の場面から、ハイオクさんや妻との思い出を振り返るといった、時間を重層化させた構成になつていて

オ この問題文は、登場人物である「彼」の視点に寄りそいながらも、必要に応じてその他の人物の視点からも物語られているため、それぞれの人物の心情が読みとりやすくなつていて

問題はこのページで終了です。

# 国語解答用紙

【二】

<input type="text"/> /10	②×5	<input type="text"/> ①	<input type="text"/> ②	<input type="text"/> ③	<input type="text"/> ④	<input type="text"/> ⑤
--------------------------	-----	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------

【三】

<input type="text"/> /9	③×3	<input type="text"/> ①	<input type="text"/> ②	<input type="text"/> ③	<input type="text"/> ④	<input type="text"/> ⑤
<input type="text"/> /20	⑤×4	<input type="text"/> ①	<input type="text"/> ②	<input type="text"/> ③	<input type="text"/> ④	<input type="text"/> ⑤
<input type="text"/> /6	③×2	<input type="text"/> ①	<input type="text"/> ②	<input type="text"/> ③	<input type="text"/> ④	<input type="text"/> ⑤
<input type="text"/> /10	⑩×1	<input type="text"/> ①	<input type="text"/> ②	<input type="text"/> ③	<input type="text"/> ④	<input type="text"/> ⑤

問一  问二  问三   
問四  问五  问六  问七   
问八  问九

人々の心を揺さぶる詩とは、

<input type="text"/> 40	<input type="text"/> 41	<input type="text"/> 42	<input type="text"/> 43	<input type="text"/> 44	<input type="text"/> 45	<input type="text"/> 46	<input type="text"/> 47	<input type="text"/> 48	<input type="text"/> 49	<input type="text"/> 50
-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------

ものである。

【三】

<input type="text"/> /8	⑥×3	<input type="text"/> ①	<input type="text"/> ②	<input type="text"/> ③	<input type="text"/> ④	<input type="text"/> ⑤
<input type="text"/> /9	⑨×1	<input type="text"/> ①	<input type="text"/> ②	<input type="text"/> ③	<input type="text"/> ④	<input type="text"/> ⑤
<input type="text"/> /12	⑥×2	<input type="text"/> ①	<input type="text"/> ②	<input type="text"/> ③	<input type="text"/> ④	<input type="text"/> ⑤
<input type="text"/> /10	⑩×1	<input type="text"/> ①	<input type="text"/> ②	<input type="text"/> ③	<input type="text"/> ④	<input type="text"/> ⑤

問一  问二  问三   
问四  问五  问六   
问七  问八  问九

【三】

<input type="text"/> 60	<input type="text"/> 61	<input type="text"/> 62	<input type="text"/> 63	<input type="text"/> 64	<input type="text"/> 65	<input type="text"/> 66	<input type="text"/> 67	<input type="text"/> 68	<input type="text"/> 69	<input type="text"/> 70
-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------

問一  问二  问三   
问四  问五  问六   
问七  问八  问九

【三】

<input type="text"/> /45	<input type="text"/> ①	<input type="text"/> ②	<input type="text"/> ③	<input type="text"/> ④	<input type="text"/> ⑤
--------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------

【三】

<input type="text"/> /45	<input type="text"/> ①	<input type="text"/> ②	<input type="text"/> ③	<input type="text"/> ④	<input type="text"/> ⑤
--------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------

【三】

<input type="text"/> /100	<input type="text"/> ①	<input type="text"/> ②	<input type="text"/> ③	<input type="text"/> ④	<input type="text"/> ⑤
---------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------

総点  受験番号   
氏名